

フライングディスク競技の参加者 動向にみる過去 25 年の歩み

大 島 寛

A Study on the trend of entries for Flying disc Sports from 1977 to 2002

Hiroshi Oshima

Abstract

The flying disc meet for individual events has recently been on the decline, although it was very popular. This study investigates how many athletes participated in each of all of the ten events each year from 1977 to 2002 in order to throw light on causes of the decline.

It considers why some events had a large number of participants and why others had a small number of participants from a viewpoint of the management of the meet and the activities by the flying-disc association. Despite of the present situation of individual events, the ultimate (team event) has been vigorous. As a matter of fact, a lot of efforts have been made in guidance and instruction for college players so as to spread this event. As a result, now they take the initiative in it. The ultimate event has a great merit: a meet for this event will be easy to manage if we can prepare a large field where a lot of matches can be held at the same time. On the other hand, individual events have a demerit: to manage a meet for individual events, we need many people's help and goods for each event. Thus, this is one of the factors that prevent college athletes from participating in individual events. To gain the stable number of participants, each prefecture's flying-disc association must manage a small scale meet for each individual event and let people know about individual events.

I. 研究の目的

フライングディスクは1940年代後半、米国コネチカット州のエール大学学生が「フリスビー・パイ・カンパニー」Frisbie Pie Companyのパイ皿を投げ合って遊んだことが起源といわれている。1948年に、その光景に興味を持ったロサンゼルス建築検査官であるフレッド・モリソン (Fred Morrison) がウォーレン・フランシオニ (Warren Franscioni) と世界最初のプラスチック製フライングディスクであるフライングソーサー (FLYIN SAUCER) を製作した。その後、幾度か飛行性能に改良を重ね、1951年にはプラトープラター (PLUTO PLATTER) というディスクをつくった。1953年にはビル・ロブズ (Bill Robes) がプラスチック製フライングディスクスペースソーサー (SPACE SAUCER) を製作している。

フラフープのブームを生み出した WHAM-O 社は、1955年にフレッド・モリソンのディスクに目をつけ、1956年に両者は共同でプラトープラター フライングソーサー (PLUTO PLATTER FLYING SAUCER) を製作、1957年に販売した。

1958年になってフリスビーの起源となった「フリスビー・パイ・カンパニー」(1871年創業) は閉じられたが、1959年に WHAM-O 社はフリスビー・パイ・カンパニーのパイ皿に刻まれているスペル「FRISBIE」を「FRISBEE」とし、フライングディスクのトレードマークとした。これ以降1982年で世界フリスビー選手権 (World Frisbee Championships) が幕を閉じるまで「FRISBEE」が最も人気のあるフライングディスクとなった。(1983年からは Flying Disc Championships が主流となり、いろいろなブランドのディスクが使われるようになった)

1958年にミシガン州エスカナダで初めてフリスビーの大会 International Frisbee Tournament (I F T) が開催された。ガッツ (Guts: 10 m離れた相手にディスクを投げキャッチされなければ得点となるキャッチ&スローの

ゲーム) が団体種目として初めて競技され、1962年にはディスタンス (Distance: ディスクの遠投距離を競う) が個人種目として初めて競技された。

1964年に「フリスビーの父」エド・ヘドリック (Ed Headrick: WHAM-O 副社長) によってガッツディスクは改良され、現在もガッツ競技公認ディスクとして使われるプロフェッショナルフリスビー (PROFESSIONAL FRISBEE) を生み出し高性能ディスクとして大好評となった。1967年になると彼は WHAM-O 社内に事務局を置く International Frisbee Association (I F A) を設立し、11万2000人が会員となった。1968年の第11回 I F T ガッツ・フリスビー大会では、従来の玩具の販促活動としてではなく「競技としてのフリスビー」のデモンストレーションを WHAM-O 社として初めて行った。I F A の大会種目もアキュラシー (Accuracy: ターゲットに向かってディスクを投げスローの正確性を競うゲーム)、MTA (Maximum Time Aloft: ディスクを投げて片手でキャッチするまでの滞空時間を競う) が加わり、多くの大会開催をきっかけにフリスビーの販売数は爆発的に増加した。

1970年代にはいると「競技としてのフリスビー」のデモンストレーションは、海外に向けられた。1971年に、カリフォルニア州サクラメント大学で初めてフリスビーの授業を行ったビル・シュナイダー (Bill Schneider) が、翌年マイク・シュナイダー (Mike Schneider) とヨーロッパ各地でフリスビーのデモンストレーションを行った。

1974年にローズボウルスタジアムで第1回世界フリスビー選手権が開催され、2万5000人の観客を集めた。ガッツ、ディスタンス、アキュラシー、MTA、フリースタイル (Freestyle: トリッキーなキャッチやスローを競うゲーム) が紹介され、「競技としてのフライングディスク」の幕開けとなった。ヨーロッパでは、この年スウェーデンに初めてフリスビー連盟が設立された。その後1977年にオーストリア、ベルギー1978年にはフィンランド、オランダにも設立さ

れた。

日本では、1975 年にフリスビーの輸入がはじめられた。男女の世界チャンピオンによるデモンストレーションが各地で行われ、この年日本フリスビー協会 (Japan Frisbee Association) が名古屋市に設立された。1976 年に名古屋市白川公園で第 1 回全日本フリスビー選手権が開催されると関東地区、関西地区では学生を中心に支部大会が行われるようになり、ローズボウルで開催される世界選手権の出場権をかけて全日本フリスビー選手権大会は、年々盛り上がりを見せるようになった。

日本フリスビー協会は、1983 年に活動拡大のために東京に本部を移設し、名称も 1984 年に「日本フライングディスク協会」(Japan Flying Disc Association) に変更している。また、1992 年には世界フライングディスク連盟 (World Flying Disc Federation) 第 6 回世界アルティメット & ガッツ選手権大会を宇都宮市で開催するまでに至り、傘下に 34 の支部・都道府県協会、日本学生フライングディスク連盟を置くようになった。

現在、フライングディスク愛好者の実数を正確には把握することはできないが、小学校、中学校、高校、大学の体育・スポーツの授業にも多く採用されており、愛好者自体は増加傾向にあると思われる。

しかしながら、1976 年以降、開催されている全日本フリスビー選手権大会、全日本フライングディスク選手権大会の趨勢をみると、参加者の増加は一時的に見られたものの、全体としては減少しつつあると思われる。

筆者は、フライングディスク競技には、早い時期から競技者として関与しているが、開催される大会の種目の変化あるいは多様化もあり、個人総合選手権大会参加者の減少には著しいものがあると実感している。また一方、団体競技であるアルティメットは、学生を中心に増加しているという印象を持つ。

このように実感されるフライングディスク競技の傾向は、今後どのような形を持って発展するの

であろうか。個人競技は、このまま衰退するのだろうか。

そこで本研究において、日米のフライングディスク競技の歴史的変遷と問題点を文献研究によって明らかにすると同時に、日本におけるフライングディスク競技の変動を、過去 25 年間実施されてきた全日本フライングディスク選手権大会の実施種目の変化、参加者動向を検討し、問題点を明らかにする。そして、個人 8 種目・団体 2 種目からなるフライングディスク競技が、今後、各種目との関わりの中で、どのように位置づけられ発展するかを比較検討するものである。

Ⅱ. 研究の方法

- ①日米のフライングディスク競技の歴史的変遷を文献によって明らかにする。
- ②過去 25 年間 (1977~2002 年) 実施されてきた全日本フライングディスク選手権大会のプログラムより、実施種目と参加者数の変化、変動を明らかにする。

Ⅲ. 研究の結果と考察

1. 個人総合種目の歴史的変遷

①米国における個人総合種目の創生と発展

1958 年に初めてフリスビーの大会 I F T (International Frisbee Tournament) で団体種目のガッツが競技されたが、個人種目は 4 年後の 1962 年にディスタンスが競技された。

1967 年にアキュラシーが競技種目に加わり、1973 年に MTA が加わった。I F T は 1974 年まで開催され、個人種目のメイン大会は世界フリスビー選手権へと受け継がれた。

1968 年ジョージ・サペンフィールド (George Sappenfield) がディスクゴルフ (Disc Golf: 決められたターゲットに向かってディスクを投げ何投でゴールできるかを競うゴルフゲーム) を考案し、1969 年の I F A 主催の大会 (All Comers Meet) でディスクゴルフが初めて紹介された。1970 年にカリフォルニア州バークレー大学で大学生ら (Berkely Frisbee Group) が木や電柱な

どをターゲットとした18ホールのゴルフコースを作り「競技としてのディスクゴルフ」が生まれようとしていた。

1974年のアメリカンオープン・フリスビー大会では、木製の箱や杭をターゲットとしてディスクゴルフコースに設置し競技された。

1976年にディスクゴルフ協会 (Professional Disc Golf Association) を設立したエド・ヘドリックは、現在使用されているディスクゴルフ・ゴールの原型となるディスク ポール ホール (Disc Pole Hole) を発表した。天盤からぶらさがったチェーンにディスクが命中すると受け皿に落ちるしくみの画期的なディスクゴルフ・ゴールが発明され、カリフォルニア州ラカナダのオークグローブ公園内に設置、18ホールのディスクゴルフコースが誕生した。毎週5000人がこのコースでディスクゴルフを楽しみ、このゴールは改良が加えられながら現在も使用されている。また、ディスクゴルフ用ディスク ナイトフライヤー (Night Flyer) もこの年製造された。

1973年のカナディアンオープン・フリスビー大会 (Canadian Open Frisbee Championships) で初めてフリースタイルが競技された。1975年にはフレディー・ハフト (Freddie Haft) とケリー・コルマー (Kerry Kolmar) によってネイルディレイ (Nail Delay: 爪の上で回転する円盤を操るテクニック) という画期的な技が生み出され、これ以降、従来のキャッチ&スローだけの演技は、多種多彩な演技へと進展していった。

1974年のアメリカンオープン・フリスビー大会 (American Open Frisbee Championships) で、DDC (Double Disc Court: ダブルスで2枚のディスクを交互に投げ合い同時に触らないようにキャッチ&スローを行うコートゲーム) が初めて競技された。

1974年の第1回世界フリスビー選手権は、ローズボウルスタジアムに2万5000人の観衆が訪れる世界で初めての大規模な大会となった。1975年の第2回世界フリスビー選手権ではディスクスタンス以外にディスクゴルフ、アキュラシー、フリースタイルの3種目が競技された。1976年

にはMTA、TRC (Throw Run&Catch: ディスクを投げて片手でキャッチするまでの走行距離を競う) が競技種目として加わりSCF (Self Caught Flight: MTA、TRCを複合したもので、どちらかを予選として競技し、もう一方を次のラウンドで競わせる方法などがある) として競技した。1978年にDDCが加わった。

1981年にはディスクソン (Discathon: 1kmのクロスカントリーコースで約30カ所あるターゲットにディスクを通過させながら走るレース) が新種目として紹介され、1982年の大会から現行の個人8種目が競技されることとなった。

②日本における個人総合種目の創生と発展

日本では、1975年に名古屋・岩本商事社内に事務局を置く日本フリスビー協会が設立された。1976年には、1974-1976年の世界フリスビー選手権の種目別優勝者11名をインストラクターとして招き、国内ツアーをおこなった。ツアー中、第1回全日本フリスビー選手権が開催され、彼らが審査員となったフリースタイルはメインイベントとなった。民放の特別番組でフリスビーが紹介され、特にフリースタイルが注目された。毎月2日間、約200人がフリースタイル月例大会に参加するほどとなり、フリスビーはヒット商品となった。

1977年の世界フリスビー選手権に初めて日本代表選手が参加した。フリスビーの輸入元でありフリスビーの普及活動に貢献していた岩本商事が経営不振に陥り、その後営業権を譲渡された東和通商がフリスビー関連の業務を引き継いだ。この頃、雑誌「POPEYE」(ポパイ) にフリスビーの記事が連載され、流行の一つとしても注目された。

1978年に人気のあったアーティスト・原田真二がつま恋コンサート・武道館ライブで来日中の世界チャンピオン4名とフリスビーを投げ、話題となった。

1979年は、競技人口の増加により地区予選を通過した者が全日本大会に出場できるようになった。そのため、個人競技と団体競技をそれぞれ単

独で開催することとなった。

1982 年と 1983 年には世界個人総合選手権大会の派遣選手を選考する大会が、全日本個人総合選手権とは別に開催された。(世界選手権大会日程が全日本大会開催期間より早くなったため)

1983 年に日本フリスビー協会が東京・ツクダオリジナル社内に事務局を移転し、1984 年には日本フライングディスク協会 (Japan Flying Disc Association) と改めた。

1982 年に WHAM-O 社は Kransco 社に買収されたため、1983 年から世界フリスビー選手権は開催されなくなり、1977 年からカリフォルニア州サンタクルーズで開催されていた世界ディスク選手権 (World Disc Championships) に日本代表選手を派遣することとなった。フリスビーブランドのディスクだけでなく他のブランドのディスクも使われるようになったこの年、Innova Champion Discs 社が誕生した。エッジの鋭いディスクを作りはじめ、AMF Voit 社、Destiny Discs 社、Discraft 社、Brand X Mfg. 社とのディスクの飛行性能の競争に一層拍車がかかった。

1984 年から再び WHAM-O 社がスポンサーとなりフリスビーだけを使用する全米フリスビーディスク選手権 (U.S. Open Frisbee Disc Championships) が開催された。1985 年の全米フリスビーディスク選手権は、賞金付きの大会となった。

1985 年には各国の協会が加盟する世界フライングディスク連盟 (World Flying Disc Federation) が設立された。世界各国でフリスビーブランドのディスクだけでなく他のブランドのディスクも使われるようになった。

1986 年は、WHAM-O 社と Bud-Light 社が全米フライングディスク選手権大会 (U.S. Open Flying Disc Championships) を共催し、特にディスタンスでは遠くへ飛ぶディスクのブランドと種類に注目されるようになった。

1986 年の全米フライングディスク選手権大会で大島寛がディスタンスの部門で優勝した。アメリカ以外の国の選手が世界規模の大会でディスタンスに優勝したことはなく Sports illustrated に

も報じられた。1987 年の全米フライングディスク選手権大会でもディスタンスと TRC の部門で優勝、MTA でも準優勝し、8 種目の総合獲得ポイントで競われる総合部門で準優勝を果たした。1988 年の世界フライングディスク選手権でも、ディスタンスの部門で優勝し、TRC では 92.64 m の世界記録をフリスビーブランドのファーストバッグモデル (FB6) で樹立した。

1986 年に (株) ヒーロー工場の企画運営による国内初の賞金付きディスクゴルフ大会 (第 1 回 L A R K 東京オープン) が東京都立川市国営昭和記念公園で行われた。1987 年には (株) ヒーロー工房内に事務局を置く日本ディスクゴルフ協会 (Japan Professional Disc Golf Association) が設立された。国営昭和記念公園では、PDGA (Professional Disc Golf Association) 主催大会の一つとしてジャパンカップ (Japan Cup) が開催され、昭和記念公園のディスクゴルフコースをホームコースとするディスクゴルフプレーヤーが増加した。

1997 年の第 16 回 PDGA 世界選手権は、賞金総額 5 万ドルで予選ラウンドから決勝ラウンドまで 1 週間にわたり開催され、7 カ国から男女 350 人が参加する大会となった。

1986 年に世界フライングディスク連盟は GAISF (General Assembly of the International Sports Federation) に加盟し、1987 年に、第 2 のオリンピックといわれるワールドゲームズ (World Games) に正式加盟した。

2001 年には秋田県でワールドゲームズが行われディスクゴルフが競技された。

2. 団体種目の歴史的変遷

①米国における団体種目の創生と発展

1955 年にプリンストン大学のロックハートホールの広場でクッキー缶のふたを使ってガッツフリスビー (GUTS FRISBEE) とよばれるゲームが行われていた。また、ダートマウス大学でもクッキー缶のふたを使って 2~4 人制でガッツを楽しんだ記録がある。当時はゴールラインまでの

距離は10 mであったがI F Tの大会から14 mに延長されている。

1958年のI F T大会でヒーリー(Healy)一家とその友人達が初めてガッツの競技を行った。1958年から1966年までヒーリー一家を中心としたミシガンのチームNORTH CENTRALが優勝し、1967年にデトロイトのチームFOUL FIVEがNORTH CENTRALを破り初優勝した記録がデトロイトの地元紙に報じられている。

1964年に販売されたプロフェッショナル フリスビー(PROFESSIONAL FRISBEE)は性能の高さに好評を得ていた。この年より現在までガッツ競技公認ディスクとしてプロフェッショナルフリスビーは、I F T大会とともに歩んでいる。(I F T大会は2003年で第46回大会を迎えた)

1974年の第1回世界フリスビー選手権でガッツが紹介され、I F T大会の参加チームも増加、1980年代にかけて60チームが競技するようになった。しかし、1990年代には参加チームが少なくなり、一部地域では3人制の競技として続けている。現在6つの都市で大会は継続されており、そのうち2つはI F T大会と全米選手権である。

一方、アルティメット(Ultimate:パスをつないで相手陣地に攻めていくチームゲーム)は、1967年にニュージャージー州コロンビア高校のジョエル・シルバー(Joel Silver)によってフリスビーフットボール(FRISBEE FOOTBALL)として考案され、1968年に初めてコロンビア高校の生徒会でフリスビーフットボール大会(FRISBEE FOOTBALL GAMES)が行われた。その後改良され、現在のアルティメットの原型となるゲームが1969年にコロンビア高校で、男女混合チームの高校生と教員チームが対戦し、11対7で高校生チームが勝利した。1970年には、ジョエル・シルバー、バジー・ヘリング(Buzzy Hellring)、ジョン・ハインズ(Jon Hines)によって、アルティメットのルールが完成された。このとき唱われたゲームの精神「SPIRIT OF THE GAME」(審判は置かず自らが自らをジャッ

ジする)は、30年以上経った現在も受け継がれている。この年、初めて高校生の大会が行われ、コロンビア高校がミルバーン高校に43対10で勝った。

1972年には、ラドガーズ大学とプリンストン大学との間で初めて大学のアルティメットの試合が行われ、29対27でラドガーズ大学が勝利したことは、ニューヨークタイムズ(NewYork Times)で報じられている。

1975年にはエール・トーナメント(Yale Tournament)が8チームで開催され、世界フリスビー選手権で競技が紹介された。1976年にエール・トーナメントは、National Ultimate Frisbee Championshipと名称変更された。

1979年にコロラド州ボルダーでアルティメット・プレーヤーズ協会(Ultimate Players Association)を結成、各地で本格的に大会が開催されるようになり、第1回クラブチーム選手権(Club Championships)が行われた。

1983年にスウェーデンで第1回世界アルティメット選手権(World Ultimate Championships)が開催され、男女ともアメリカが優勝した。1984年にはボストンで第1回大学選手権(College Ultimate Championships)が男女それぞれ16チームで行われた。

1989年にドイツで第1回世界クラブチーム選手権(World Ultimate Club Championships)が開催され、ワールドゲームズでもアルティメットが初めて紹介された。

2001年のワールドゲームズ秋田大会でアルティメットが初めて公式競技として開催され、2002年の世界クラブチーム選手権は過去最大の24カ国から120チームが参加し、2300人が競技した。現在、30カ国で10万人が登録し、アメリカでは、1万3000人がプレーしている。

②日本における団体種目の創生と発展

日本では、1975年に岩本商事と新東通信によってガッツの全国キャンペーンが行われた。人気テレビ番組の中で10分間のガッツフリスビーのコーナーが設けられ、子門真人のレコード

「ガッツfrisbee」も発売され、frisbeeの知名度は全国で 80% にまで上がった。(新東通信社報) この年、岩本商事社内に事務局を置く日本frisbee協会が設立され、名古屋がfrisbeeの発信源となった。

1976 年には、第 1 回全日本frisbee選手権でガッツとアルティメットが紹介され、東京・日大講堂では、ガッツの日米オールスターゲームが開催され、NHK で放映された。

1977 年から大会を開催、ガッツとアルティメットの両種目とも、愛知学院大学が慶応大学に勝ち初代チャンピオンになった。

1977-1978 年の世界frisbee選手権の選手派遣から国内でもガッツとアルティメットの競技者を徐々に増やし、1979 年に第 1 回全日本ガッツ & アルティメット大会が大阪万博記念公園球技場で開催され、1983 年までガッツ & アルティメットとして共催した。(のちにガッツは 1976 年、アルティメットは 1977 年が第 1 回大会と変更された)

アルティメットは、1984 年の世界選手権から日本代表チームが派遣され、1992 年の宇都宮市で開催された世界選手権では女子が優勝、男子は 3 位に輝いた。特に、アルティメット委員長の本

田雅一の発案により世界大会の優秀選手 10 名を日本に招聘し行った講習会により競技者は倍増した。(1990 年、日米フレンドシップツアー、1991 年、アルティメットコスモス、1992 年から 1995 年は関東・中部・関西地区で日米親善アルティメットと称し講習会を開催、競技者は 519 名から 1115 名に増加)。

1998 年の世界選手権で男子が初めて決勝に進出し準優勝を果たした。競技人口は大学生を中心に急激に増加し、フライングディスク競技の種目の中で最も人気のあるスポーツとなった。1984 年～1986 年は個人・団体全 10 種目の開催となったが、1987 年からは単独で開催され、ガッツは 200～300 人の参加者を得て、毎年競技されている。

3. フライングディスク大会参加者の動向をめぐって

個人種目の競技人口の動向を明らかにするため、1977～2002 年の大会プログラムをもとに全日本個人総合選手権の参加者数を調査した。(図 1)

1982 年と 1983 年には世界個人総合選手権の派

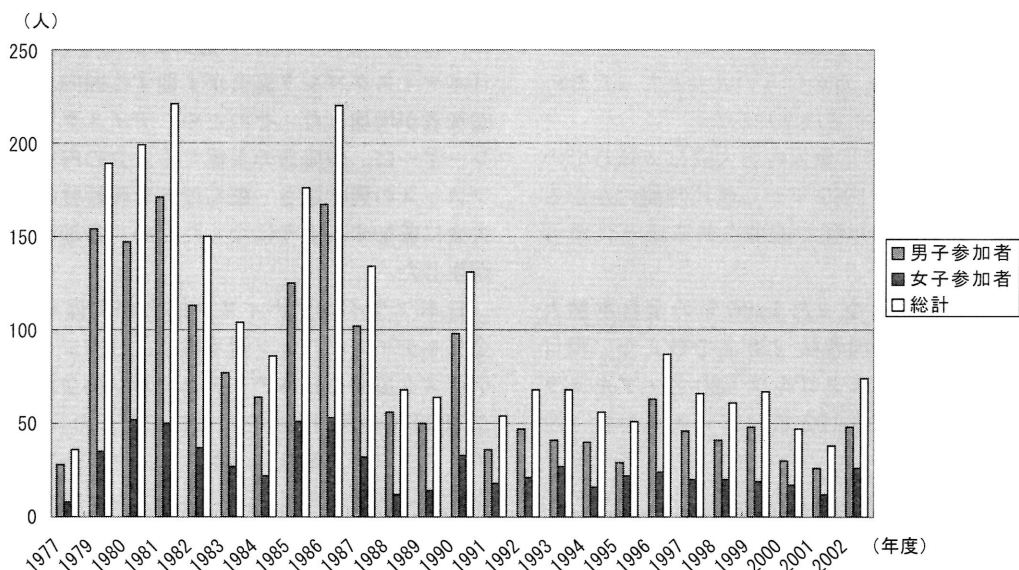


図1. 全日本個人総合選手権 男女別参加者数の変化 (1977-2002)

遣選手を選考する大会が、全日本個人総合選手権とは別に開催された。

1976年からディスタンス、フリースタイル、ガッツの3種目の競技ではじまった全日本大会は、1977年にアルティメット、MTAが加わり5種目で競技が行われた。(この年より総合上位入賞者が世界選手権へ派遣される)1979年からはDDCが加わり6種目で競技が行われた。1981年は、新たにTRCが加わった。1983年の世界選手権日本代表選手選考会からアキュラシー、ディスクゴルフが加わり9種目、1984年にディスクソーンが新種目として加わり現在の10種目すべてが競技されるようになった。

1979年から1981年までは、競技人口の増加により地区大会を勝ち抜いた者だけが全日本大会に出場した。特に、1981年の世界大会は賞金付きの大会となったため一段と盛り上がりを見せた。しかし、1982年にWHAM-O社はKransco社に買収されたため、1983年の世界フリスビー選手権は開催されず、また、全日本大会総合上位入賞者が無償で世界選手権へ派遣される制度が無くなり、参加者が減少した。

1984年は、再びWHAM-O社がスポンサーとなり全米フリスビーディスク選手権が開催されたものの、無償派遣制度が無くなったため、さらに参加者が減少した。1985年から全米フリスビーディスク選手権は、賞金付きの大会となったため1986年にかけて参加者は増加した。

1984-1986年までは個人総合大会は8種目での選手権であったが1987年から競技時間のかかるディスクゴルフは単独で開催されるようになった。

過去最大規模となった1986年の全日本個人総合選手権は、参加者数220名を数えた。種目別にみると、ディスクゴルフ220名・アキュラシー169名・DDC192名・ディスタンス177名・SCF177名・フリースタイル32名・ディスクソーン96名である。また、ガッツ、アルティメットも同じ会場で日程を前後して開催されており、3日間で10種目のすべてを競技運営している。1970年代のフリスブームの火付け役と

なったフリースタイルが他の種目並みの参加者であれば(1981年167名のエントリー)2日間では大会運営できない規模となっていた。それぞれの種目に時間をかけて競技する必要性を問いかける大会となったため、1987年からはディスクゴルフ、団体種目のガッツ、アルティメットの全日本選手権大会は、それぞれ単独で別の日程で開催されるようになった。

1987-1991年までの5年間は、ディスクゴルフ以外の7種目で総合優勝が競われた。世界選手権出場=ローズボウルを目標に技を競い合った当時のトッププレーヤーは、1986年を境に全日本個人総合選手権にはあまり参加しなくなった。1987年に日本ディスクゴルフ協会が設立されてからはディスクゴルフプレーヤーとしてプレーを楽しむ者が多くなった。しかし、全日本ディスクゴルフ選手権の参加者数は、単独開催の1987年以降増えてはならず、49名(1993)～127名(1990)と、ばらつきがみられる。

アルティメットでは、全日本アルティメット選手権を制することがプレーヤーの名誉であるが、ディスクゴルフの場合、日本フライングディスク協会が主催する全日本ディスクゴルフ選手権を制することが、必ずしもプレーヤーの名誉であるとは限らない。日本フライングディスク協会とは別に、日本ディスクゴルフ協会が設立されたため、日本ディスクゴルフ協会が主催する国内ツアーの参加者が増加した。そのため、ディスクゴルフプレーヤーは、両協会の主催する大会の内容・ゴルフコースの興味深さ・難易度等を判断材料として大会に参加するようになったため、参加者の分散が生じた。

日本フライングディスク協会が開催を続けた全日本ディスクゴルフ選手権は、日本フライングディスク協会と日本ディスクゴルフ協会が共催した2000年の秋田大会を最後に中断した。その後、ディスクゴルフ競技は日本ディスクゴルフ協会が主催する大会でディスクゴルフプレーヤーに愛好されている。

1992年以降は、ディスクゴルフも含めて8種目で総合優勝が競われるべきである、という声の

もと、全日本個人総合選手権と全日本ディスクゴルフ選手権が同じ日程でおこなわれた。

1976 年から 1986 年までの 11 年間は、世界連盟の動きにあわせて国内のフライングディスク競技は大会運営された。1987 年以降は個人総合種目、ディスクゴルフ、ガッツ、アルティメットの全日本選手権はそれぞれ単独で開催され、種目の

特性を鑑み、独自の展開を示している。

団体種目の競技人口の動向を明らかにするために、1977～2002 年の大会プログラムをもとに全日本選手権の参加者数を調査した。

ガッツ (図 2)、アルティメット (図 3)、の参加者数を以下に示す。

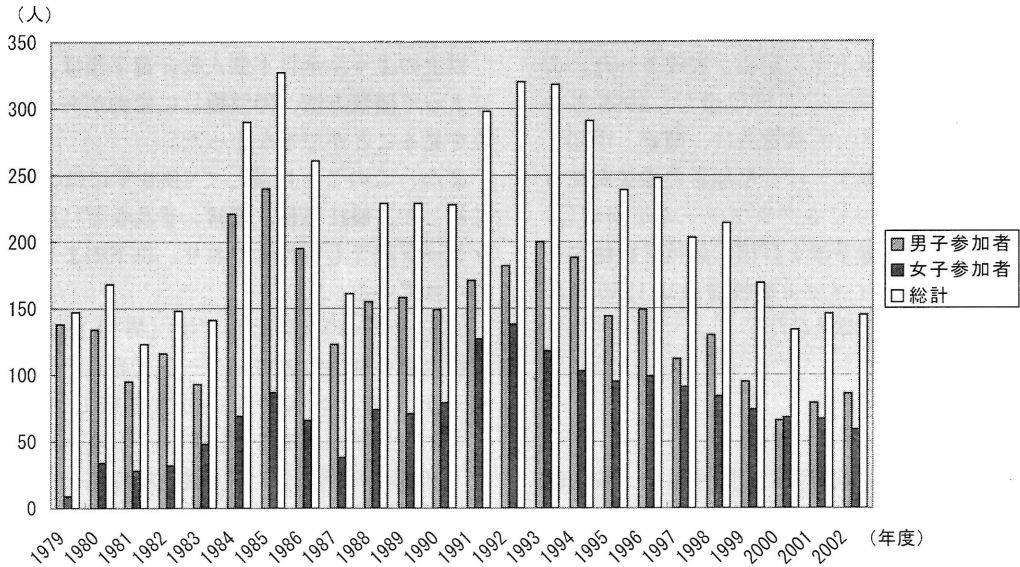


図2. 全日本ガッツ選手権 参加者数の変化 (1979-2002)

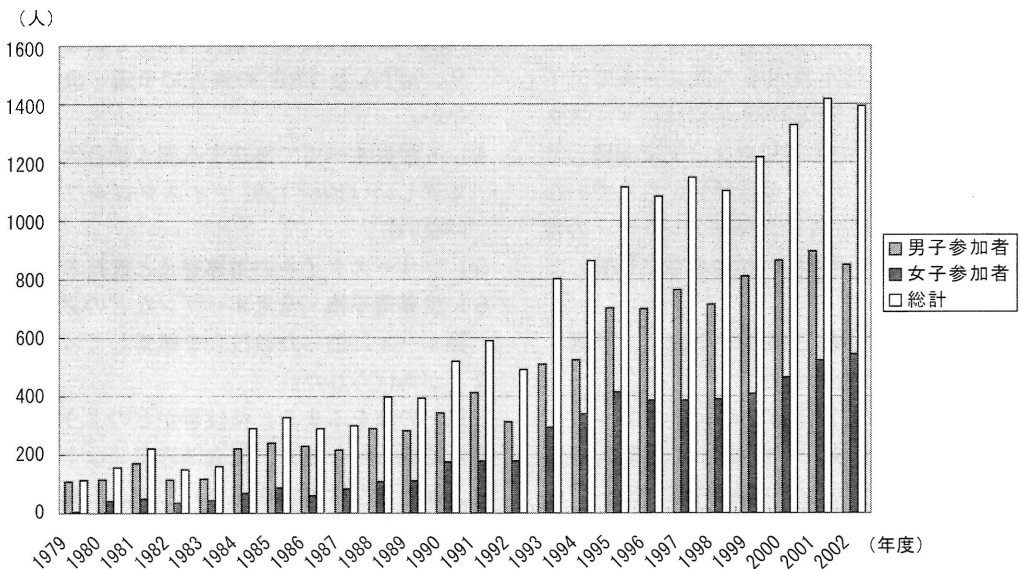


図3. 全日本アルティメット選手権 参加者数の変化 (1979-2002)

各競技単独開催の1987年以降アルティメットの参加者数には顕著な変化が伺える。特に、前述の1990～1995年に毎年、夏休み期間に大学生を中心に実施された指導普及活動に相まってメディアへの露出も増えた。NHK衛星放送では、1991年の全日本アルティメット選手権、1992年の栃木県宇都宮市で開催された世界アルティメット選手権が放映され、民放では、横浜スタジアムで開催された社会人優勝チームと学生選手権優勝チームが対決する全日本王座決定戦が放映された。これらの影響で大学生の注目度は増し、1995年の日米親善アルティメット講習会は、関東・中部・関西の3地区で開催するほど参加者の増加が見られた。社会人になってもクラブチームを結成し、世界クラブチーム選手権を目標に競技を継続する者も増え、アルティメット競技者数は1989年の393名から約4倍に増加した。

4. 今後の課題

アルティメット競技者数が増加する中、個人総合選手権の参加者数は、1986年(220名)をピークに低迷している。しかし、1990年(131名)、1996年(87名)、2002年(74名)は、前年度より大幅に上回っている。いずれも、ディスクゴルフコースを持つ公園で開催されているからだと考えられる(2002年は小牧四季の森コースでディスクゴルフを開催)。1988-1989年には、ディスクゴルフコースを持つ国営昭和記念公園で開催しているが、ディスクゴルフを競技種目に含んでいない。このことは、ディスクゴルフプレーヤーの参加の有無が個人総合選手権の参加者数に影響していると思われる。

1981年の大会は4種目開催で全種目、予選・準決勝・決勝がおこなわれた。

1986年の大会は、2日間でガッツ・アルティメットを含む全10種目が開催され、個人総合はDDC以外はすべて決勝のみの大会であった。1987年の大会(134名)は、ガッツと並行して行われた(ディスクゴルフは含まれていない)。1990年の大会(131名)は、4日間でおこなわ

れ、4日目の午後から、全日本ディスクゴルフ選手権がおこなわれている。1992年の大会(68名)は、全日本ディスクゴルフ選手権と並行しておこなわれたが、参加者は68名であった。1993年(68名)-1995年(56名)は参加者が減ったため、1996年(86名)は、開催地を国営昭和記念公園に移し、ディスクゴルフプレーヤーの参加を得て、年齢層も幅広くなった(ジュニア～シニアグランドマスター)。

以上のように全日本個人総合選手権は、その年によって開催方法、開催種目に変動があり、一貫性を見ることができなかった。

また、このことに関して1996年には、参加者に対して、競技種目、運営、普及などに関するアンケート調査も行われており、以下のようにまとめられている。

プレーヤーの意見としては(第21回全日本個人総合選手権出場者アンケート,1996)

1) ディスタンスを思いっきり楽しめる広いフィールドがあること。

(1991-1995年まで陸上競技場開催のため、飛距離を抑えたディスクに使用を制限)

2) DDCはトーナメントで行うより、リーグ戦(予選)とトーナメント(準決勝・決勝)を併用する方が良い。

3) SCFはMTAを予選、TRCを決勝とするより、MTAとTRCの両方で予選・決勝を行いたい。

4) 8種目すべてで競技する個人総合大会であって欲しい(1987-1991ディスクゴルフを含んでいない)。

5) フリースタイルの指導普及と競技者の獲得。

6) 世界選手権・全米オープンなどの雰囲気と世界ルールに則った競技会を運営してほしい。

などがあげられた。

以上の点をふまえ、競技者がどのような大会を望んでいるかを捉え、大会運営機関は十分に検討し、配慮しなければならないと考えられる。

しかしながら、現行においては、日本フライングディスク協会の年間行事計画、(2003年行事計画)を見るように、団体競技であるアルティメッ

トの開催が中心であり、ここでも個人総合種目競技の軽視が伺える。

5 月 3 日 (土) ・ 4 日 (日)	第 29 回全日本ガッツ選手権大会 (長野県茅野市)
7 月 19 日 (土) ～ 21 日 (祝)	第 28 回全日本フライングディスク個人総合選手権 (愛知県小牧市・木曽三川公園)
8 月 4 日 (月) ～ 6 日 (水)	第 14 回全日本学生アルティメット選手権大会 東日本 1 次予選 (栃木県宇都宮市)
8 月 6 日 (水) ～ 8 日 (金)	第 14 回全日本学生アルティメット選手権大会 西日本支部 1 次予選 (愛知県岡崎市)
8 月 20 日 (水) ～ 21 日 (木)	第 14 回全日本学生アルティメット選手権大会 決勝戦進出校決定戦 (静岡県富士市)
8 月 23 日 (土)	第 14 回全日本学生アルティメット選手権大会決勝戦 (東京都駒沢陸上競技場)
8 月 30 日 (土) ～ 31 日 (日)	第 28 回全日本アルティメット 選手権大会 西日本 1 次予選 (神戸しあわせの村)
9 月 6 日 (土) ～ 7 日 (日)	第 28 回全日本アルティメット 選手権大会 東日本 1 次予選オープン (ひたちなか市)
9 月 13 日 (土) ～ 14 日 (日)	第 28 回全日本アルティメット 選手権大会 東日本 1 次予選オープン (ひたちなか市) 東日本レディース予選 (ひたちなか市)
9 月 14 日 (日) ～ 15 日 (月)	第 28 回全日本アルティメット 選手権大会 西日本 2 次予選 (神戸しあわせの村)
9 月 23 日 (火) ・ 27 日 (土) ～ 28 日 (日)	第 28 回全日本アルティメット選手権大会 中部地区予選 (愛知県岡崎市)
9 月 27 日 (土) ～ 28 日 (日)	第 28 回全日本アルティメット選手権大会 東日本オープン 2 次予選 (ひたちなか市)
11 月 1 日 (土) ～ 2 日 (日)	第 28 回全日本アルティメット選手権大会本戦 (栃木県 宇都宮市)
11 月 8 日 (土) ～ 9 日 (日)	第 13 回全日本学生新人アルティメット選手権大会 (静岡県富士市富士川緑地公園)
11 月 22 日 (土)	第 28 回全日本アルティメット選手権大会決勝戦 (東京都江東区夢の島競技場)

また、この行事とは別に、指導普及に関する行事も以下のように開催されている。

2004 年 2 月 28 日 (土) ～ 29 日 (日)	西日本地区 JFDA 公認指導者認定講習会
2004 年 3 月 6 日 (土) ～ 7 日 (日)	東日本地区 JFDA 公認指導者認定講習会
2004 年 3 月 13 日 (土) ～ 14 日 (日)	中部地区 JFDA 公認指導者認定講習会

一方、日本ディスクゴルフ協会の大会も、第1戦から第20戦まで毎月開催されているために、多くの人手と用具の必要な個人総合種目の月例会、あるいは指導普及イベントを開催・運営することは極めて困難な状況であるといわざるを得ない。

このように考えると、今後の個人総合種目の参加者獲得の方策として以下の点をあげることができる。

- 1) 世界選手権大会の誘致。
- 2) インストラクター認定試験と個人総合大会との接点を密接なものにする。
- 3) 個人総合種目の中からディスクゴルフが単独成長したように、種目別の魅力の再認識と普及活動（オフシーズンのトレーニングとしてディスクアソンを紹介する等）
- 4) 日本学生フライングディスク連盟への啓蒙。
- 5) 都道府県協会の個人総合種目の位置づけ
- 6) 手間のかからない運営方法の開発

など、日本フライングディスク協会の個人総合種目（オーバーオール）委員会の活動だけでは、1970-1980年代のような活況を取り戻すことは困難であると考えられる。

新しい発想のもとで、新しい取り組みも必要であり、その一つとして、都道府県協会レベルでのWEB上での練習会や大会情報提供、そして掲示板を使った意見交換、ネットワーク作りなどを取り入れることにより、フライングディスク愛好者に対する情報提供やサービスを常に心がけなければならないと考えられる。

IV. まとめ

フライングディスク競技10種目のうち、この25年間で最も参加者数が増加したのは団体種目のアルティメットである。このことは大学生に対する指導普及活動や興味づけが常に行われてきたことが大きな要因と考えられる。

また、アルティメット競技は、一日に多くの試合数をこなすことのできるフィールドさえあれば、比較的容易に大会運営ができること、また、日本学生フライングディスク連盟の設立により

大学生主体の大会運営が可能となったため、安定した大学生の獲得を図ることができたと考えられる。

一方、個人総合大会は、種目によっては多くの人手と用具が必要であるために運営それ自体が大きな負担を強いるものである。このことは、日本学生フライングディスク連盟の活動の大部分がアルティメットであることから理解できる。

また、30年以上経った現在も受け継がれているゲームの精神「SPIRIT OF THE GAME」(審判は置かず自らが自らをジャッジする)が反映していることも考えられる。

ところで、1977年から1982年にかけて日本フライングディスク協会は、日本代表選手（男子6名・女子2名）の世界フリスビー選手権大会参加に係る費用を全額負担したことは、当時の個人総合種目大会の盛況に影響を与えたと考えられる。現在の状況下でこのような援助方法をそのまま当てはめるのは難しいことであるが、男子2名・女子2名の大会参加に係る費用の協会からの全額負担は、各競技者にとって見れば、高い動機付けにもなり、今後検討すべきことだと思われる。一つの方策として、全額負担者には、帰国後の大会報告と指導者認定講習会での指導義務などの責務を与える、といったことも考えられる。今後、このようなことも踏まえ、個人総合種目の幅広い層への指導普及活動や興味付けが必要であると考えられる。その契機として、世界選手権規模の大会誘致と開催が性急に望まれる。また、各都道府県協会や学生連盟への個人総合種目の位置づけ、啓蒙が必要だと思われる。そして、各協会、連盟と協力し、大会運営の工夫と開発が急務であると考え

謝辞

1975年の協会設立当初から1980年代のフリスビーを取り巻く動静については、佐藤佳子氏（元東和通商）並びに小林信也氏（世界フリスビー選手権日本代表・ノンフィクション作家）から貴重な教示を得た。記して深く感謝の意を表したい。

(表 1) 全日本個人総合選手権 参加者動向 (1976-2002)

第 1 回	(1976. 9.)	名古屋市白川公園	* 資料なし
第 2 回	(1977. .)	長野県陸上競技場 (3 種目)	男 28 名 女 8 名 計 36 名
第 3 回	(1978. .)	東京駒沢競技場 (3 種目)	* 資料なし
第 4 回	(1979. 7. 20 - 22)	愛知県一宮市営陸上競技場 (4 種目)	男 154 名 女 35 名 計 189 名
第 5 回	(1980. 7. 25 - 27)	兵庫県立明石公園競技場 (4 種目)	男 147 名 女 52 名 計 199 名
第 6 回	(1981. 7. 24 - 26)	東京サマーランド (MTA から SCF へ)	男 171 名 女 50 名 計 221 名
第 7 回	(1982. 8. 12 - 14)	東京都世田谷区立総合運動場	男 113 名 女 37 名 計 150 名
第 8 回	(1983. 10. 8 - 10)	茨城県高萩市大心苑 (ディスクを除く)	男 77 名 女 27 名 計 104 名
第 9 回	(1984. 10. 8 - 10)	茨城県高萩市大心苑 (10 種目)	男 64 名 女 22 名 計 86 名
第 10 回	(1985. 10. 10 - 11)	茨城県高萩市大心苑 (10 種目)	男 125 名 女 51 名 計 176 名
第 11 回	(1986. 10. 10 - 12)	茨城県高萩市大心苑 (10 種目)	男 167 名 女 53 名 計 220 名
第 12 回大会よりアルティメット、ガッツ、ディスクゴルフ単独開催			
第 12 回	(1987. 5. 3 - 5)	茨城県高萩市大心苑 (ゴルフを除く)	男 102 名 女 32 名 計 134 名
第 13 回	(1988. 4. 29 - 5. 1)	国営昭和記念公園 (ゴルフを除く)	男 56 名 女 12 名 計 68 名
第 14 回	(1989. 4. 30 - 5. 2)	国営昭和記念公園 (ゴルフを除く)	男 50 名 女 14 名 計 64 名
第 15 回	(1990. 8. 13 - 17)	国営昭和記念公園 (ゴルフを除く)	男 98 名 女 33 名 計 131 名
第 16 回	(1991. 11. 22 - 24)	神戸市しあわせの村 (ゴルフを除く)	男 36 名 女 18 名 計 54 名
第 17 回	(1992. 11. 21 - 23)	茨城県高萩市大心苑・全日本ゴルフ会	男 47 名 女 21 名 計 68 名
第 18 回	(1993. 5. 1 - 3)	長野県茅野市運動公園 (全種目)	男 41 名 女 27 名 計 68 名
第 19 回	(1994. 4. 29 - 5. 1)	長野県茅野市運動公園 (全種目)	男 40 名 女 16 名 計 56 名
第 20 回	(1995. 5. 3 - 5)	長野県茅野市運動公園 (全種目)	男 29 名 女 22 名 計 51 名
第 21 回	(1996. 8. 30 - 9. 1)	国営昭和記念公園 (全種目)	男 63 名 女 24 名 計 87 名
第 22 回	(1997. 8. 22 - 24)	国営昭和記念公園 (全種目)	男 46 名 女 20 名 計 66 名
第 23 回	(1998. 7. 31 - 8. 2)	国営昭和記念公園 (全種目)	男 41 名 女 20 名 計 61 名
第 24 回	(1999. 7. 2 - 4)	国営昭和記念公園 (全種目)	男 48 名 女 19 名 計 67 名
第 25 回	(2000. 8. 25 - 27)	国営海の中道海浜公園 (全種目)	男 30 名 女 17 名 計 47 名
第 26 回	(2001. 7. 20 - 22)	国営海の中道海浜公園 (全種目)	男 26 名 女 12 名 計 38 名
第 27 回	(2002. 7. 26 - 28)	国営木曽三川公園・小牧 (全種目)	男 48 名 女 26 名 計 74 名

(表2) 全日本個人総合選手権派遣選手最終選考会 参加者動向 (1982-1983)

第 1 回	(1982.5.3-5)	愛知県一宮市市営陸上競技場	男 94 名 女 30 名 計 124 名
第 2 回	(1983.5.1-3)	三重県メナード青山カントリー	男 40 名 女 13 名 計 53 名

(表3) 全日本ガッツ選手権 参加者動向 (1976-2002)

第 1 回	(1976.9)	名古屋市白川公園	東西対抗戦
第 2 回	(1977)	長野県陸上競技場	男女計 2 チーム参加
第 3 回	(1978)	東京駒沢競技場	男女計 8 チーム参加
第 4 回	(1979.7.20-22)	愛知県一宮市市営陸上競技場	男 154 名 女 35 名 計 189 名
第 5 回	(1979.11.23-24)	大阪万博記念公園球技場	男 138 名 女 9 名 計 147 名
第 6 回	(1980.11.22-24)	筑波大学	男 134 名 女 34 名 計 168 名
第 7 回	(1981.11.21-23)	愛知青少年公園陸上競技場	男 95 名 女 28 名 計 123 名
第 8 回	(1982.11.21-23)	大阪万博記念公園	男 116 名 女 32 名 計 148 名
第 9 回	(1983.7.8-10)	松戸市民スポーツセンター	男 93 名 女 48 名 計 141 名
第 10 回	(1984.10.7-8)	茨城県高萩市大心苑	男 221 名 女 69 名 計 290 名
第 11 回	(1985.10.12-13)	茨城県高萩市大心苑	男 240 名 女 87 名 計 327 名
第 12 回	(1986.10.10-11)	茨城県高萩市大心苑	男 195 名 女 66 名 計 261 名
第 13 回	(1987.5.3-5)	茨城県高萩市大心苑	男 123 名 女 38 名 計 161 名
第 14 回	(1988.5.1-3)	国営昭和記念公園	男 155 名 女 74 名 計 229 名
第 15 回	(1989.5.2-4)	国営昭和記念公園	男 158 名 女 71 名 計 229 名
第 16 回	(1990.5.3-5)	茨城県高萩市大心苑	男 149 名 女 79 名 計 228 名
第 17 回	(1991.5.3-5)	茨城県高萩市大心苑	男 171 名 女 127 名 計 298 名
第 18 回	(1992.5.4-5)	栃木県宇都宮市柳田緑地	男 182 名 女 138 名 計 320 名
第 19 回	(1993.5.3-5)	長野県茅野市運動公園	男 200 名 女 118 名 計 318 名
第 20 回	(1994.5.2-4)	長野県茅野市運動公園	男 188 名 女 103 名 計 291 名
第 21 回	(1995.5.5-7)	長野県茅野市運動公園	男 144 名 女 95 名 計 239 名
第 22 回	(1996.5.3-5)	長野県茅野市運動公園	男 149 名 女 99 名 計 248 名
第 23 回	(1997.5.3-5)	長野県茅野市運動公園	男 112 名 女 91 名 計 203 名
第 24 回	(1998.5.3-5)	長野県茅野市運動公園	男 130 名 女 84 名 計 214 名
第 25 回	(1999.5.2-4)	長野県茅野市運動公園	男 95 名 女 74 名 計 169 名
第 26 回	(2000.5.3-5)	長野県茅野市運動公園	男 66 名 女 68 名 計 134 名
第 27 回	(2001.5.3-5)	長野県茅野市運動公園	男 79 名 女 67 名 計 146 名
第 28 回	(2002.4.28-29)	長野県茅野市運動公園	男 86 名 女 59 名 計 145 名

(表 4) 全日本アルティメット選手権 参加者動向 (1977 - 2002)

第 1 回	(1977)	長野県陸上競技場	男女計 2 チーム
第 2 回	(1978)	東京駒沢競技場	男女計 4 チーム
第 3 回	(1979. 7. 20 - 22)	愛知県一宮市営陸上競技場	資料なし
第 4 回	(1979. 11. 23 - 24)	大阪万博記念公園球技場	男 108 名 女 5 名 計 113 名
第 5 回	(1980. 11. 22 - 24)	筑波大学	男 115 名 女 41 名 計 156 名
第 6 回	(1981. 11. 21 - 23)	愛知青少年公園陸上競技場	男 171 名 女 50 名 計 221 名
第 7 回	(1982. 11. 21 - 23)	大阪万博記念公園	男 114 名 女 35 名 計 149 名
第 8 回	(1983. 7. 8 - 10)	松戸市民スポーツセンター	男 117 名 女 43 名 計 160 名
第 9 回	(1984. 10. 7 - 8)	茨城県高萩市大心苑	男 221 名 女 69 名 計 290 名
第 10 回	(1985. 10. 12 - 13)	茨城県高萩市大心苑	男 240 名 女 87 名 計 327 名
第 11 回	(1986. 10. 10 - 12)	茨城県高萩市大心苑	男 229 名 女 60 名 計 289 名
第 12 回大会よりアルティメット単独開催			
第 12 回	(1987. 11. 21 - 23)	国営昭和記念公園	男 216 名 女 83 名 計 299 名
第 13 回	(1988. 10. 8 - 10)	国営昭和記念公園	男 289 名 女 108 名 計 397 名
第 14 回	(1989. 11. 3 - 5)	国営昭和記念公園	男 282 名 女 111 名 計 393 名
第 15 回	(1990. 11. 23 - 25)	国営昭和記念公園	男 343 名 女 176 名 計 519 名
第 16 回	(1991. 9. 21 - 23)	国営木曽三川公園	男 412 名 女 178 名 計 590 名
第 17 回	(1992. 5. 2 - 3)	栃木県宇都宮市柳田緑地	男 312 名 女 179 名 計 491 名
第 18 回	(1993. 11. 20 - 21)	栃木県宇都宮市柳田緑地	男 509 名 女 293 名 計 802 名
第 19 回	(1994. 11. 18 - 20)	栃木県宇都宮市柳田緑地	男 524 名 女 339 名 計 863 名
第 20 回	(1995. 11. 3 - 5)	栃木県宇都宮市柳田緑地	男 701 名 女 414 名 計 1115 名
第 21 回	(1996. 11. 2 - 4)	栃木県宇都宮市柳田緑地	男 698 名 女 385 名 計 1083 名
第 22 回	(1997. 11. 1 - 3)	栃木県宇都宮市柳田緑地	男 763 名 女 385 名 計 1148 名
第 23 回	(1998. 11. 21 - 23)	栃木県宇都宮市柳田緑地	男 713 名 女 389 名 計 1102 名
第 24 回	(1999. 11. 2 - 4)	栃木県宇都宮市柳田緑地	男 810 名 女 408 名 計 1218 名
第 25 回	(2000. 11. 21 - 23)	栃木県宇都宮市柳田緑地	男 864 名 女 464 名 計 1328 名
第 26 回	(2001. 11. 21 - 23)	栃木県宇都宮市柳田緑地	男 895 名 女 522 名 計 1417 名
第 27 回	(2002. 11. 21 - 23)	栃木県宇都宮市柳田緑地	男 849 名 女 544 名 計 1393 名

(表5) 全日本ディスクゴルフ選手権 参加者動向 (1983-2000)

第 1 回	(1983. 5. 1 - 3)	三重メナード青山カントリー	男 40 名 女 13 名 計 53 名
第 2 回	(1983. 10. 8 - 10)	茨城県高萩市大心苑	男 61 名 女 17 名 計 78 名
第 3 回	(1984. 10. 8 - 10)	茨城県高萩市大心苑	男 64 名 女 17 名 計 81 名
第 4 回	(1985. 10. 10 - 11)	茨城県高萩市大心苑	男 124 名 女 51 名 計 175 名
第 5 回	(1986. 10. 10 - 12)	茨城県高萩市大心苑	男 165 名 女 53 名 計 218 名
第 6 回大会よりディスクゴルフ選手権単独開催			
第 6 回	(1987. 8. 29 - 30)	三重メナード青山カントリー	男 93 名 女 29 名 計 122 名
第 7 回	(1988. 8. 6 - 7)	三重メナード青山カントリー	男 71 名 女 24 名 計 95 名
第 8 回	(1989. 8. 5 - 6)	豊橋市高師緑地公園	男 94 名 女 29 名 計 123 名
第 9 回	(1990. 8. 16 - 17)	国営昭和記念公園	男 94 名 女 33 名 計 127 名
第 10 回	(1991. 8. 10 - 11)	滋賀県希望が丘文化公園	男 60 名 女 28 名 計 88 名
第 11 回	(1992. 11. 21 - 23)	茨城県高萩市大心苑	男 47 名 女 21 名 計 68 名
第 12 回	(1993. 8. 7 - 8)	小牧市四季の森	男 35 名 女 14 名 計 49 名
第 13 回	(1994. 7. 2 - 3)	小牧市四季の森	男 60 名 女 28 名 計 88 名
第 14 回	(1995. 8. 5 - 6)	国営ひたち海浜公園	男 84 名 女 23 名 計 107 名
第 15 回	(1996. 7. 28 - 29)	国営ひたち海浜公園	男 66 名 女 19 名 計 85 名
第 16 回	(1997. 7. 20 - 21)	千葉・昭和の森	男女計 97 名
第 17 回	(1998. 7. 19 - 20)	千葉・昭和の森	男 58 名 女 18 名 計 76 名
第 18 回	(1999. 9. 4 - 5)	奈良県立橿原公園	資料なし
第 19 回	(2000. 7. 22 - 23)	秋田県立中央公園	資料なし

(表 6) 全日本学生選手権 & 新人戦 (1990-2002) 参加者動向

回数 (年度)	学生選手権・開催地	チーム数・参加数 (男)	チーム数・参加数 (女)	総計
第 1 回 (1990)	埼玉県上福岡総合運動場	5 チーム・96 名	6 チーム・97 名	193 名
第 2 回 (1991)	宇都宮市柳田緑地	10 チーム・158 名	6 チーム・85 名	243 名
第 3 回 (1992)	宇都宮市柳田緑地	資料なし	資料なし	約 400 名
第 4 回 (1993)	宇都宮市柳田緑地	20 チーム	12 チーム	約 700 名
第 5 回 (1994)	宇都宮市柳田緑地	26 チーム・551 名	17 チーム・294 名	845 名
第 6 回 (1995)	国営木曽三川公園	32 チーム・651 名	27 チーム・455 名	1106 名
第 7 回 (1996)	駒沢総合運動場	35 チーム・662 名	26 チーム・444 名	1106 名
第 8 回 (1997)	駒沢総合運動場	35 チーム・686 名	24 チーム・431 名	1117 名
第 9 回 (1998)	駒沢総合運動場	38 チーム・678 名	28 チーム・468 名	1146 名
第 10 回 (1999)	駒沢総合運動場	36 チーム・619 名	31 チーム・403 名	1022 名
第 11 回 (2000)	駒沢総合運動場	36 チーム・607 名	26 チーム・427 名	1034 名
第 12 回 (2001)	駒沢総合運動場	38 チーム・571 名	27 チーム・476 名	1047 名
第 13 回 (2002)	駒沢総合運動場	34 チーム・532 名	26 チーム・390 名	922 名
回数 (年度)	学生選手権新人戦開催地	チーム数・参加数 (男)	チーム数・参加数 (女)	総計
第 1 回 (1991)	江戸川区ラグビー場	7 チーム・83 名	8 チーム・54 名	137 名
第 2 回 (1992)	高萩・大心苑	資料なし	資料なし	約 250 名
第 3 回 (1993)	宇都宮市柳田緑地	22 チーム	14 チーム	約 400 名
第 4 回 (1994)	宇都宮市柳田緑地	27 チーム・338 名	20 チーム・240 名	578 名
第 5 回 (1995)	宇都宮市柳田緑地	29 チーム・368 名	22 チーム・264 名	632 名
第 6 回 (1996)	宇都宮市柳田緑地	34 チーム・384 名	22 チーム・273 名	657 名
第 7 回 (1997)	宇都宮市柳田緑地	35 チーム・388 名	25 チーム・296 名	684 名
第 8 回 (1998)	宇都宮市柳田緑地	35 チーム・375 名	27 チーム・281 名	713 名
第 9 回 (1999)	宇都宮市柳田緑地	37 チーム・410 名	25 チーム・265 名	675 名
第 10 回 (2000)	宇都宮市柳田緑地	36 チーム・407 名	27 チーム・310 名	717 名
第 11 回 (2001)	富士市富士川緑地	36 チーム・391 名	27 チーム・290 名	681 名
第 12 回 (2002)	富士市富士川緑地	36 チーム・383 名	31 チーム・330 名	713 名

(表7) 全日本個人総合選手権 種目別参加者数 (1976-2002)

	開 催 地	ディス タンス	フリース スタイル	D D C	M T A	T R C	A C C U R A C Y	G O L F	ディス スカ	参加者数
第 1 回	(1976 名古屋)	資料なし	資料なし							資料なし
第 2 回	(1977 長野)	36名	18名		36名					36名
第 3 回	(1978 駒沢)	資料なし	資料なし		資料なし					資料なし
第 4 回	(1979 一宮)	189名	資料なし	資料なし	189名					189名
第 5 回	(1980 明石)	199名	90名	166名	199名					199名
第 6 回	(1981 東京)	221名	167名	202名	221 (SCF) 名					221名
第 7 回	(1982 世田谷)	150名	57名	132名	150 (SCF) 名					150名
第 8 回	(1983 大心苑)	72名	37名	74名	37名	87名	29名	77名	18名	104名
第 9 回	(1984 大心苑)	73名	26名	82名	68 (SCF) 名		50名	85名	39名	86名
第 10 回	(1985 大心苑)	121名	24名	82名	109 (SCF) 名		114名	52名	64名	176名
第 11 回	(1986 大心苑)	177名	32名	192名	177 (SCF) 名		169名	220名	96名	220名
第 12 回	(1987 大心苑)	93名	23名	110名	110名	73名	134名		56名	134名
第 13 回	(1988 昭和)	53名	22名	68名	50名	41名	56名		44名	68名
第 14 回	(1989 昭和)	38名	21名	64名	39名	37名	38名		52名	64名
第 15 回	(1990 昭和)	78名	14名	74名	77名	70名	89名 (127名)		53名	131名
第 16 回	(1991 神戸)	48名	4名	54名	49名	48名	52名		42名	54名
第 17 回	(1992 茅野)	40名	9名	38名	37 (SCF) 名		42名	68名	20名	68名
第 18 回	(1993 茅野)	46名	5名	56名	43 (SCF) 名		52名	68名	35名	68名
第 19 回	(1994 茅野)	37名	9名	38名	42 (SCF) 名		43名	56名	25名	56名
第 20 回	(1995 茅野)	41名	9名	36名	40 (SCF) 名		42名	51名	27名	51名
第 21 回	(1996 昭和)	52名	5名	30名	40 (SCF) 名		59名	82名	24名	87名
第 22 回	(1997 昭和)	41名	9名	30名	34 (SCF) 名		42名	59名	23名	66名
第 23 回	(1998 昭和)	45名	7名	34名	43 (SCF) 名		47名	51名	26名	61名
第 24 回	(1999 昭和)	47名	12名	32名	42 (SCF) 名		53名	57名	24名	67名
第 25 回	(2000 海中)	39名	6名	32名	41 (SCF) 名		44名	42名	30名	47名
第 26 回	(2001 海中)	33名	9名	32名	35 (SCF) 名		34名	34名	24名	38名
第 27 回	(2002 木曽)	56名	21名	48名	56 (SCF) 名		57名	45名	30名	74名

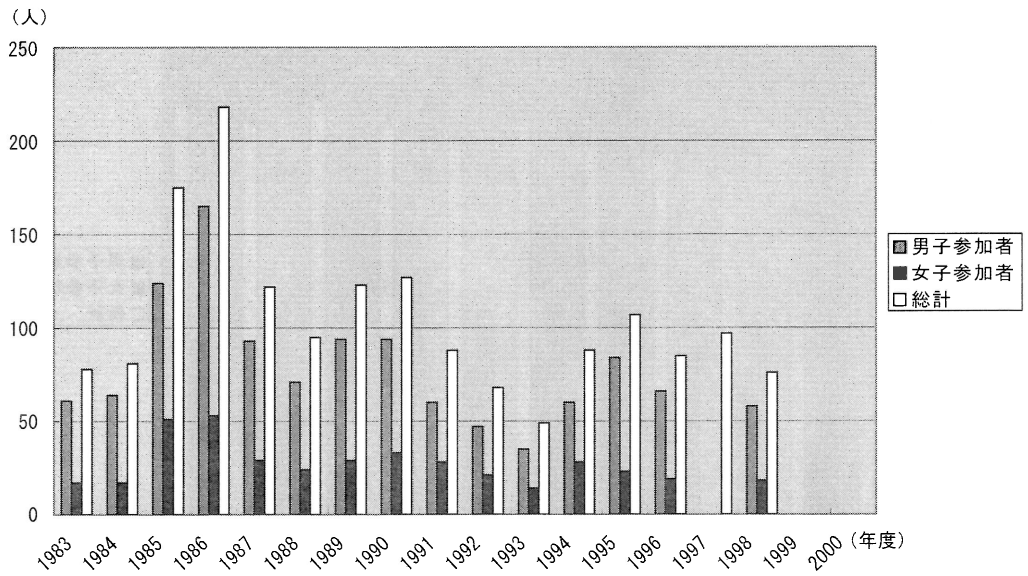


図4. 全日本ディスクゴルフ選手権 参加者数の変化(1983-2000) * 1997、99、2000年資料なし

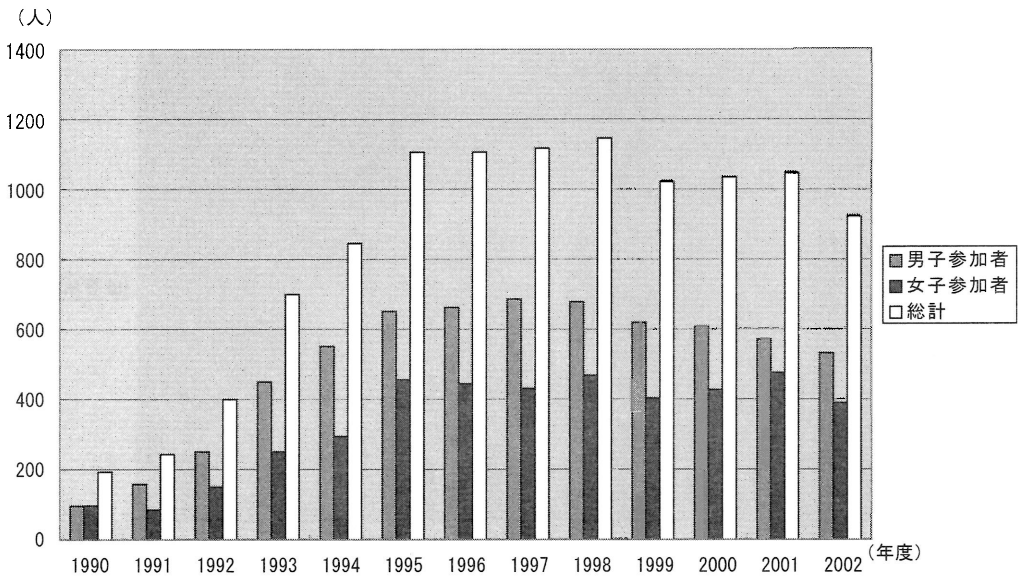


図5. 全日本学生アルティメット選手権 参加者数の変化(1990-2002)

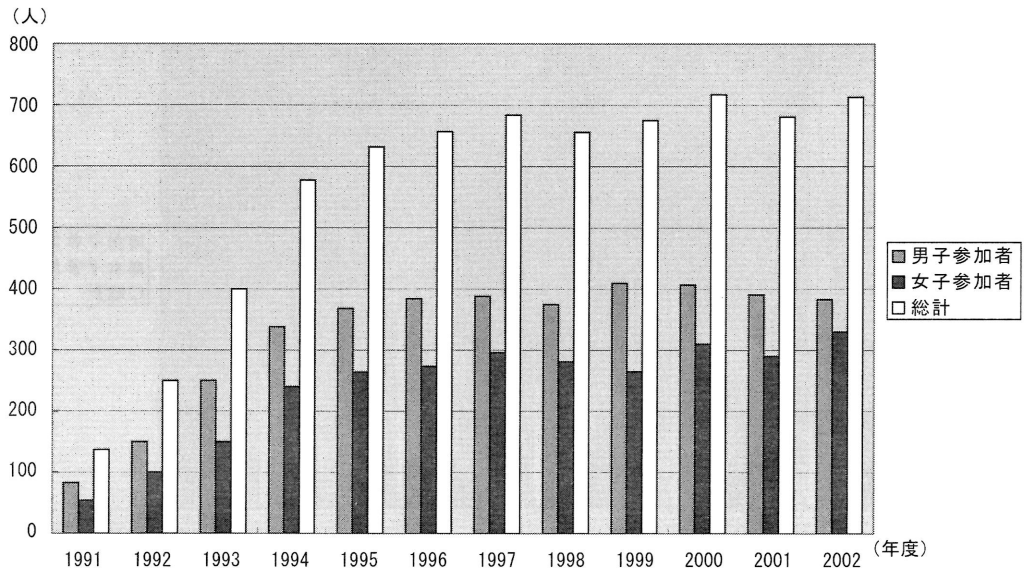


図6. 全日本学生アルティメット選手権 新人参加者数の変化 (1991-2002)

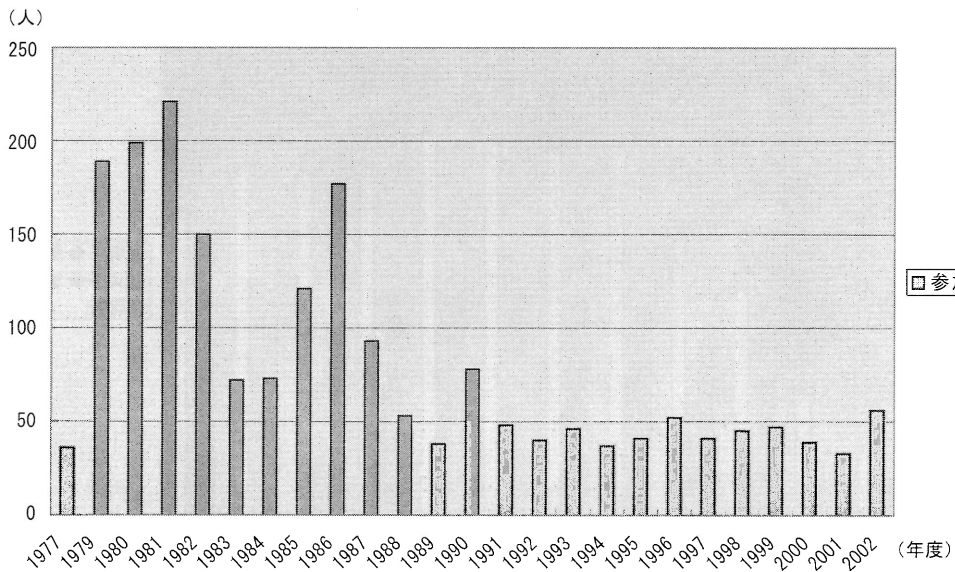


図7. 全日本個人総合選手権 ディスタンス 参加者数の変化 (1977-2002)

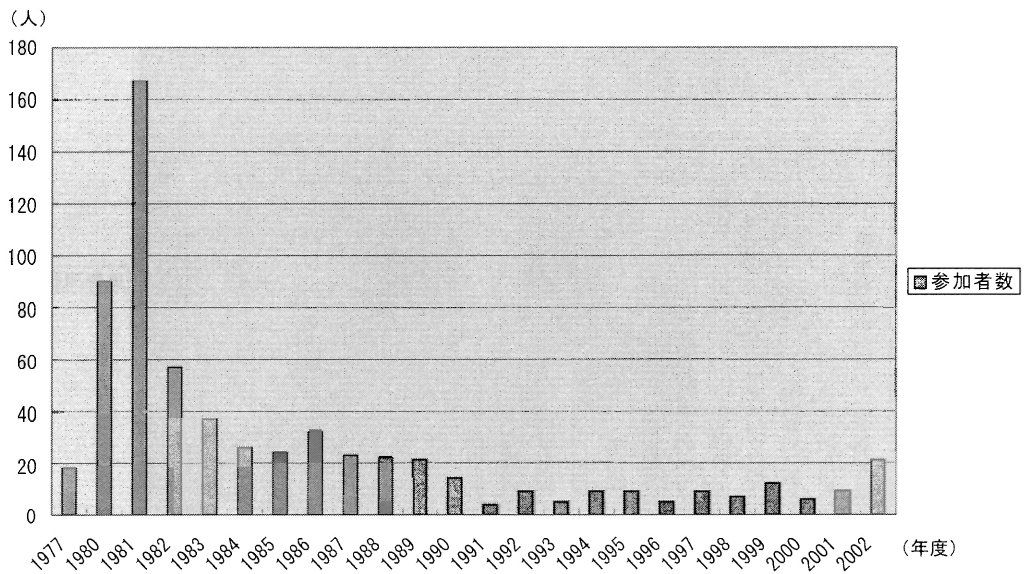


図 8. 全日本個人総合選手権 フリースタイル 参加者数の変化 (1977-2002)

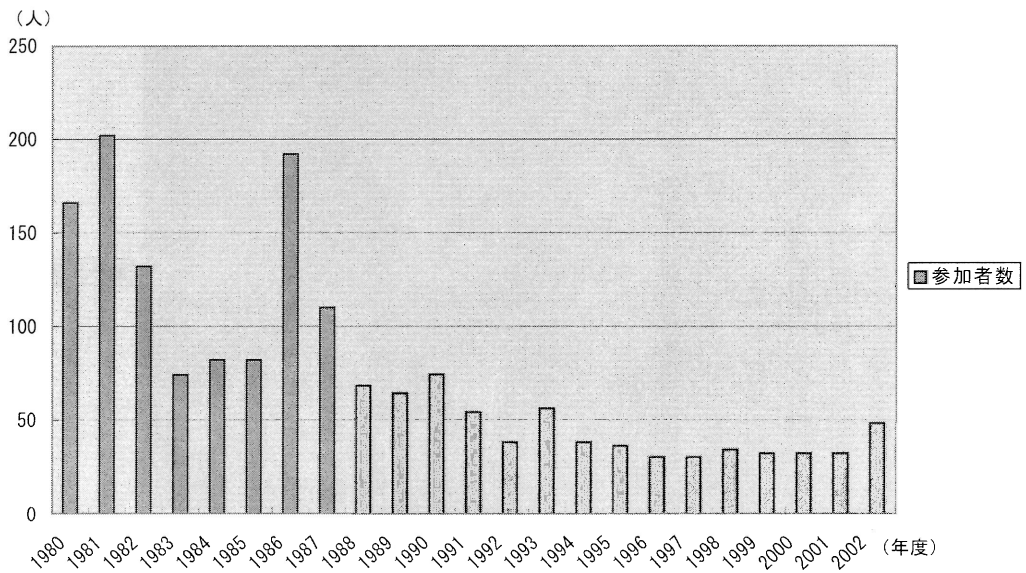


図 9. 全日本個人総合選手権 DDC 参加者数の変化 (1980-2002)

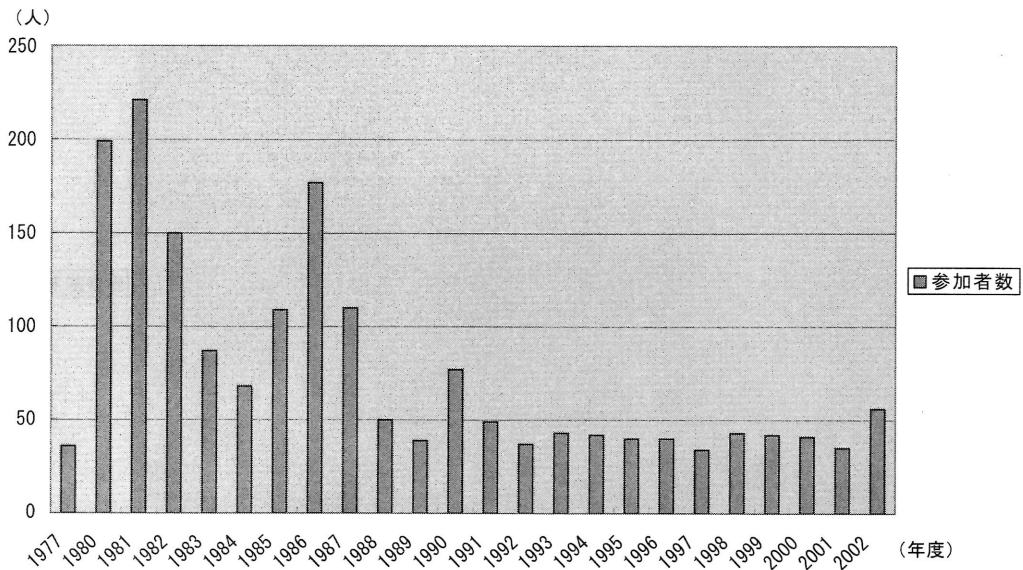


図 10. 全日本個人総合選手権 SCF 参加者数の変化 (1977-2002)

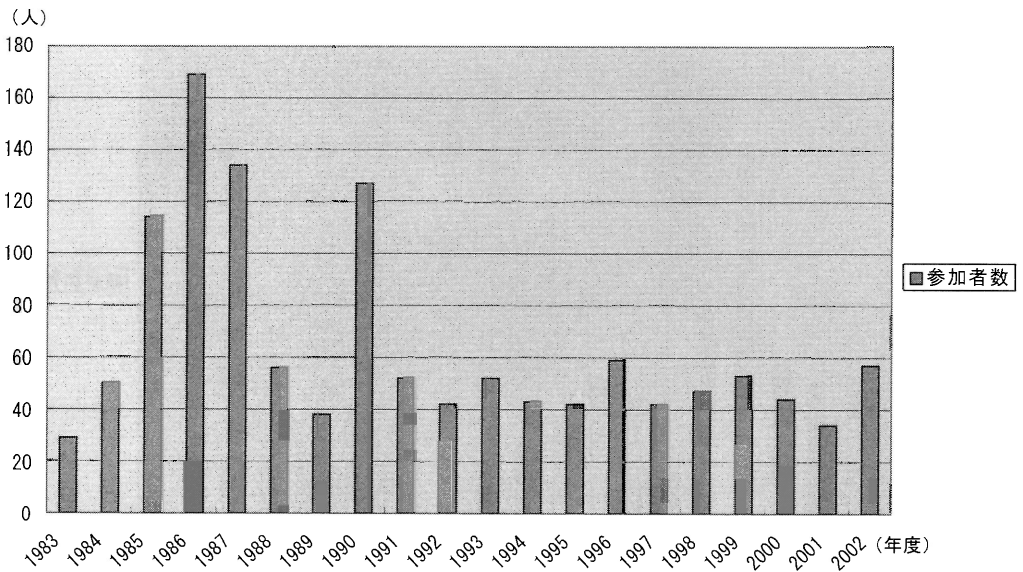


図 11. 全日本個人総合選手権 アキュラシー 参加者数の変化 (1983-2002)

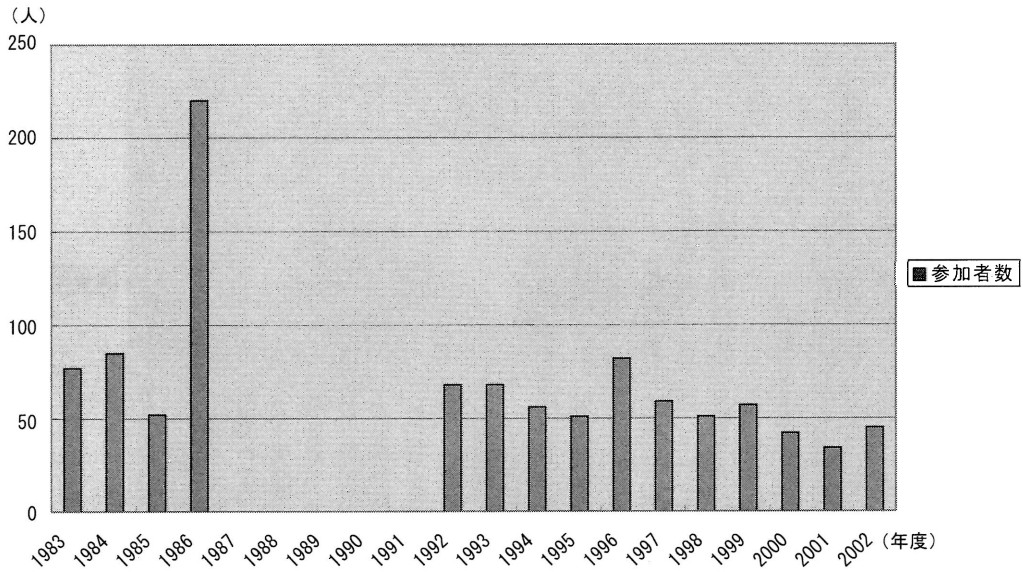


図 12. 全日本個人総合選手権 ディスクゴルフ参加者数の変化(1983-2002) *1987-91年開催なし

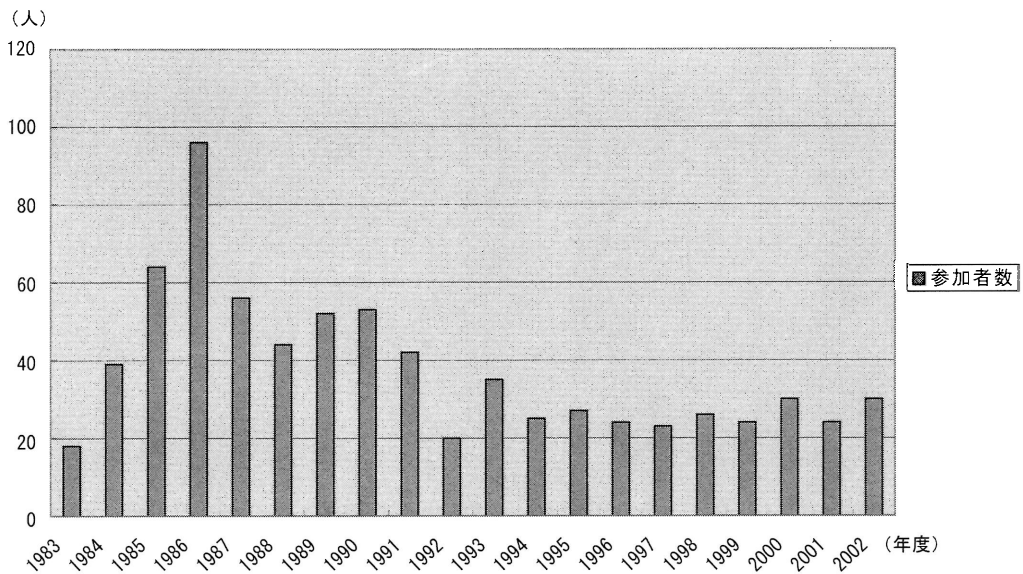


図 13. 全日本個人総合選手権 ディスカソン 参加者数の変化(1983-2002)

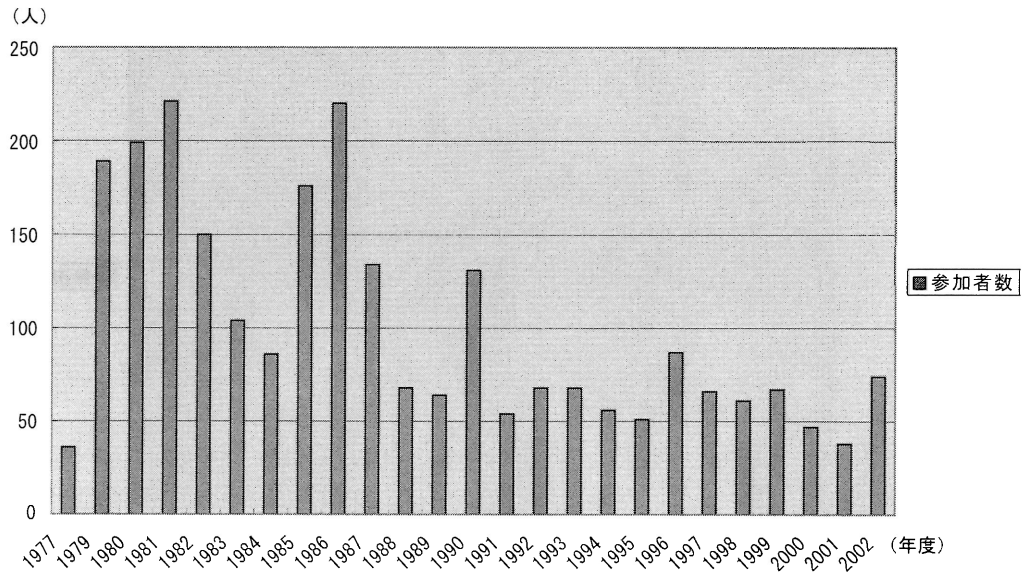


図14. 全日本個人総合選手権 参加者数の変化 (1977-2002)

文 献

- Flying disc Times(1985-2003) Japan Flying disc Association,12-57
- FRISBEE disc TIMES (1981-1983) Japan Frisbee disc Association,2-11
- FRISBEE disc WORLD(1980) International Frisbee disc Association
- JPDGA News Letter(1990-1996) Japan Disc Golf Association,1-25
- Kanto DISC POWER(1987) 日本フライングディスク協会 .1-12
- 小林信也 (1979) フリスビーがうまくなる本、文潮出版
- Mark Danna & Dan Poynter(1978) FRISBEE PLAYERS' HANDBOOK. Santa Barbara: Parachunting Publications
- 大島寛ほか (1992) フライングディスク入門 高橋和敏 (監)、タッチダウン
- 大島寛ほか (2003) フライングディスク指導者テキスト, 日本フライングディスク協会
- Stancil E.D.Johnson(1975) FRISBEE, practitioner's manual and definitive treatise. New York: Workman Publishing Company
- The Official Rules of Flying Disc Sports (1996) World Flying disc Federation
- Victor A.Malafronte(1998)The Complete Book of Frisbee, Alameda: American Trends Publishing Co.
- World Frisbee Disc Championships (1977-1981) International Frisbee disc Association
- 山森玲治 (1979) Sports Notes 13.Frisbee、鎌倉書房
- 全日本選手権大会プログラム (1977-2002) 日本フライングディスク協会
- 全日本学生選手権大会プログラム (1990-2002) 日本学生フライングディスク連盟